

(7) 同情の宗教としてのキリスト教（「反キリスト者」の7）

キリスト教は「同情の宗教(die Religion des Mitleidens)」である。「同情」は「生命感情のエネルギー」を高める「強壯的情動」とは反対の「抑うつ性」のものである。「同情」すれば人は「力」を失う。確かに「苦悩」によって「力」が失われるが、「同情」によって「力の喪失」は増大し幾倍かになる。そのことによって「苦悩」そのものが伝染する。特に「ナザレ人の死」によって「生と生のエネルギー」のすべてが失われてしまった。「同情」は「生を危険にする性格」のものである。それは「展開」や「淘汰」の法則を妨げ、まさに「没落」せんとする者を保存する。「生の廃嫡者」や「生の犯罪者」のために防戦する。このような「同情」を、われわれは「徳」、さらには「徳そのもの」と呼んできたのである。ⁱ

ショーペンハウアーはこの点では正しかった。「同情」とは「虚無主義の実践(die Praxis des Nihilismus)」である。それは「頹廢の強化」への主要な道具であり、「無へ」人を勧める。ただし、それを「無」とは言わない。その代わりに「彼岸」、「神」あるいは「真の生」と言う。あるいは「涅槃」、「救済」、「至福」と言う。これらは「宗教-道徳的特異体質」から由来する「無邪気な修辭」すぎない。ただし、それらの「崇高な言葉の覆い」を取ると、「無邪気」どころではない。それは「生に敵対的な傾向(die lebensfeindliche Tendenz)」であり、ショーペンハウアーがそうであった。ⁱⁱ

アリストテレスは「同情」を「病的で危険な状態」と解し、時折「下劑(ein Purgativ)」＝「悲劇」をかけた方が良くと言っている。われわれは、ショーペンハウアーに見られる、そしてセント・ペテルブルクからパリに到り、トルストイからヴァーグナーまでの「文学的芸術的頹廢」が示している「同情の病的で危険な蓄積」に一撃を加える手段を「生の本能」から探さなければならない。ⁱⁱⁱ

「不健康な近代性の只中」にあって、「キリスト教的同情」より不健康なものはない。「ここで医者であること、ここで仮借ないこと、ここでメスを揮うこと」、これがわれわれに相応しいことであり、「われわれの人間愛のあり方」であり、それによってわれわれは「哲学者」であり、「極北の民」である。^{iv}

(8) 無と否定の弁護者（「反キリスト者」の8）

われわれに「敵対する者」たちは、神学者と「神学者の血を身体にもっているもの」すべて、及びすべての哲学である。自然科学者や生理学者諸氏の「自由精神ぶり(die Freigeisterei)」は「一つの冗談」にすぎない。彼らには「情熱」や「苦悩」が欠けている。また、神学者の流す「害毒」は広く行き渡り、「高慢」という「神学者本能」は至る処に見出される。今日「理想主義者」だと思っている人々にも同じものが見出される。彼らも「僧侶」と同様すべての「偉大な概念」を手に入れ、すべてを見下している。「謙讓」、「貞潔」、「赤貧」、一言で言えば、「神性さ」こそ「生」に対して言いようのないほど多くの「害毒」を及ぼしている。「純粋な精神」は「純粋な嘘」である。僧侶は「生の否定者、中傷者、害毒者」を職業とする者であり、この「無と否定の意識的弁護者」が「真理の代理人」であるならば、「真理」は逆立ちしているのである。^v

(9) 虚無的意志「反キリスト者」の9)

「神学者の血」が「身体」の内にある者は、すべての事に対して「歪んでおり、不正直」である。そこから展開される「激情」が「信仰」と呼ばれるが、それは「癒しがたい虚偽性」に苦しまないために眼を断固として閉じてしまうことである。この誤った「光学」から「道徳」や「徳」や「神聖さ」が作られ、また、その「光学」を「神聖不可侵(sakrosankt)」のものとしてしまう。これは「神学者本能」であり、神学者が「真」と感じるものは「虚偽」である。彼らの影響が及ぶところでは「価値判断」は逆立ちしている。「生」にもっとも有害なものが「真」と呼ばれ、「生」を高め、肯定し、勝ち誇らせるものが「虚偽」と呼ばれる。その根底において起こっていることは、「終わりへの意志」、「虚無的意志」が「力」を意志するということである。^{vi}

ⁱ Ibid., 7, S.172-173

ⁱⁱ Ibid., 7, S.173-174

ⁱⁱⁱ Ibid., 7, S.174

^{iv} Ibid.

^v Ibid., 8, S.174-175

^{vi} Ibid., 9, S.175-176